

土器と鉄の生産



古代の土器(額見遺跡、小松市埋蔵文化財センター所蔵) 古代の人々が生産した土器は、橙色の土師器と灰色の須恵器で、食器、貯蔵、調理などの容器として使用された。



須恵器を焼いた窯跡(ニツ梨豆岡向山古窯跡群、小松市埋蔵文化財センター提供) 須恵器の生産技術は朝鮮半島から伝来したもので、小松丘陵では5世紀末頃(1600年前)から生産が始まる。地下に設けた窖窯は、土器を高温に焼き上げる専用施設であった。

加賀地方における須恵器の生産は、五世紀末頃に小松市ニツ梨町の丘陵地で始まり、その後十世紀後半までの約五〇〇年の期間、戸津町から林町、那谷町などの丘陵地で生産が続いた。確認された窯跡は二〇〇基を越えており、その生産規模は北陸随一と云われている。

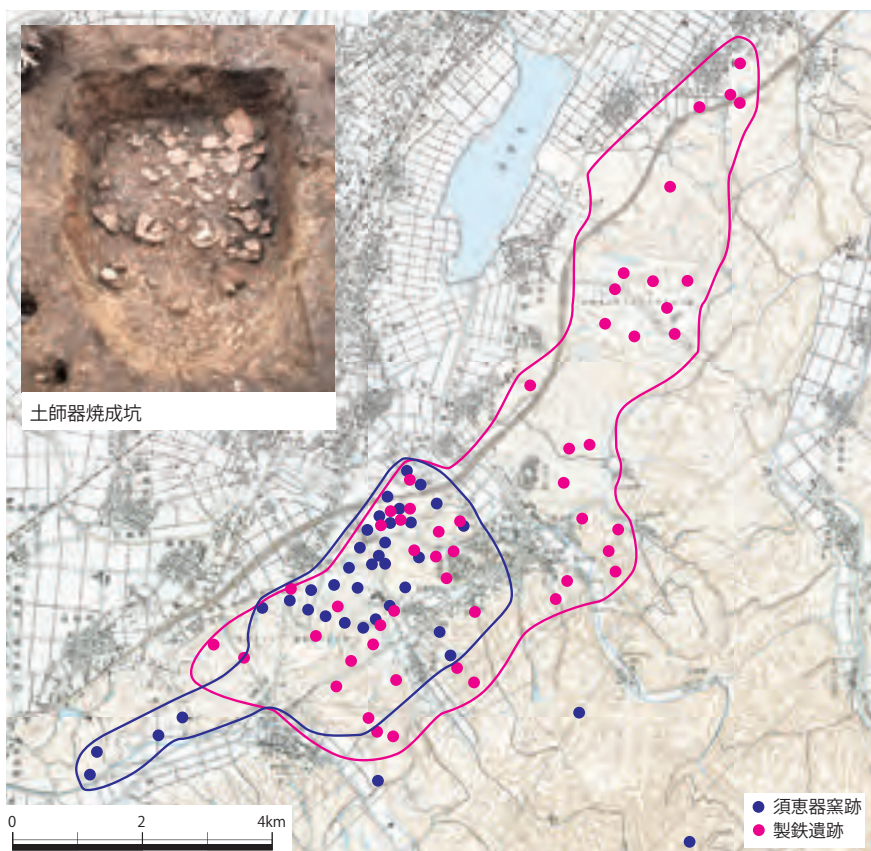
焼成された須恵器は、蓋杯・碗・高杯などの供膳具をはじめとして、貯蔵具、調理具、文房具、祭祀具、建築部材など多様な製品があった。このため奈良

日本の土器は、約一万三〇〇〇年前の縄文土器に始まり、弥生土器、古墳(平安時代の土師器へと発展したが、生産の中心は低火度で焼成した煮炊き用の深鉢や甕などであった。

このため五世紀前半に朝鮮半島の南部から日本へ伝来した青灰色の焼物「須恵器」は、革新的な土器として、

日本列島の各地へと広がった。その技術的な特徴は、回転台の轆轤を使用した土器の成形と、斜面に構築したトンネル状の窖窯による土器の高火度焼成にあった。

埋葬には、土師器と須恵器の容器を併用しながらも、煮炊きに土師器の鍋や



生産遺跡の分布図 小松市南部の丘陵地は、良質な粘土と燃料に恵まれた環境にある。古代には土器や鉄の生産が広がり、中世では加賀焼、近世はいぶし瓦や九谷焼などが生産された。国土地理院発行2万5000分の1地形図（小松、平成13年・動橋、平成9年）を使用



鉄生産の跡地（蓮代寺製鉄遺跡、石川県埋蔵文化財センター提供） 古代の製鉄遺跡は、溝で区画された内部に製鉄炉を築き、その脇に鑄型を据えることで鉄製品を生産していた。近くの斜面には、燃料の木炭を焼いた炭窯も置かれていた。

釜を多用し、貯蔵や醸造には硬質な須恵器の壺や甕を使用するなど、その特性を生かして使い分けをしていた。

また、小松南部の丘陵地では古代の生産遺跡として、製鉄遺跡の稼働があ

った。この製鉄とは、砂鉄や鉄鉱石に炭を加えて加熱し、加工用の鉄素材を造り出す作業である。

七世紀後半に豎形の製錬炉と炭焼窯が設置された蓮代寺製鉄遺跡は、県内

最古の製鉄遺構として知られている。

十世紀の林遺跡では、製鉄炉の脇に銅の鑄型が発見され、製錬から製品まで一貫した鉄の生産が行われていたことが判明した。

木場町から那谷町の丘陵地には、約六〇か所もの古代の製鉄遺跡が、須恵器の窯場と重なる形で分布している。

これは耐火性に優れた粘土と燃料にも恵まれた環境が、古代の基幹産業を發展させ、北陸地方でも最大規模の生産地を形成したことを伝えている。

（垣内光次郎）